宗像

神門前にて職員等が出迎へるなか、撤却材が到着

伊勢神宮より古殿舎撤却材到着

～平成の大造営第二期事業にて使用～

三月十二日、伊勢の神宮古殿舎撤却材が当大社に運び込まれた。これは、平成二十五年に第六十二回式年遷宮において撤去された古材が、全国の縁故ある神社へ譲与されるのを当大社も申請しており、今回凡そ一五〇石の御用材を譲り受けることになったものである。

受領に先だち九日、高向宮司他担当者二名が御礼挨拶のため伊勢神宮に参上し、高城少宮司に面会。衷心より謝辞を申し上げ、引続き内宮において神楽を奉納させて頂いた。

翌日、受領場所の

到着したトラック３台

平成ノ大造営

時満ちて道ひらく

余滴

春は出会いと別れの季節である。そしてこの時季に否応なく目にするのが、卒業・入学式における国歌「君が代」斉唱に反対する、一部の教師達の姿である▼君が代の原歌は『古今和歌集』のよみ人しらず（作者不明）の賀歌「わが君は 千代にましませ さざれ石の いはほとなりて 苔のむすまで」と詠まれた古歌で、それから時代が下り、江戸初期になると現在の歌詞の「君が代は 千代に八千代に さざれ石の 巌となりて 苔のむすまで」となり、「君」は「主賓」又、婚儀の席では「新郎」をさすなど、祝い歌として広く人々に歌い継がれてきた和歌である。明治に入ると、宮内省雅楽課の伶人が作曲を行い、ドイツ人音楽家フランツ・エッケルトにより西洋風の和声をつけて演奏される。以降、事実上の国歌として定着する▼では、国歌で言う「君」とは誰をさすのか。やはり「天皇」であろう。日本国の象徴であられる天皇の御代が八千代に続き栄えることこそ、我国の永遠の繁栄を意味する▼「被災地の冬の暮らしは いかならむ 陽の暖かき東京にゐて」陛下が東日本大震災の被災地の人々に思いを寄せ、詠まれた御製である。両陛下をはじめ皇族方は、常に国民に心を寄せ続けておられる。一方、私たち国民はその御心をどれだけ理解し、受け止めることが出来ているだろうか▼「君が代」は、そうした天皇陛下の大御心に対して、感謝と敬愛の情を表す〝返歌〟である。（床）

神具・装束・授与品
井筒
装束店
〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る
フリーダイヤル 0120-075-980
授与品店
〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23
フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

神宮山田工作場において午前八時より当社職員が立会いのもと運送業者が慎重に積込みを行い、伊勢の地を午後一時に出発、陸路にて無事に宗像の地に搬送された。

到着当日は、晴天のなか午前八時五十分神宮古殿舎撤去材が積み込まれた十tトラック三台が宮司以下職員、責任役員等が出迎えるなか神門前へ到着。ドライバーの方々も神前に参列し下賜奉告祭が斎行された。奉告祭終了後は、予め収納準備を整えた保管場所にて積み下ろしがなされ、今後の活用に備えられた。

今回の神宮古殿舎撤去材下賜に至る経緯は、昭和五十年に復興を遂げた現在の第二宮・第三宮の社殿が、第六十回式年遷宮（昭和四十八年）の際、特別に下賜された別宮の古殿を移築再建されたものであり、数多の関係者のご尽力を仰いだものである。約四十年の時を経て傷みが見受けられ、修復時期となった今、復興当時の方々の思いとともに我々もまた、修復にはぜひ神宮の古材を使用したいとの要望が叶ったものである。

古材を使用しての修復事業としては、沖津宮社殿も神宮に許可を頂いているので、併せて今後順次計画を進めていく次第である。

伊勢・山田工作場での積込み

伊勢・山田工作場

積込みを終へ、伊勢を出発

下賜奉告祭（本殿）

神門前に整列し到着を出迎へる職員ら

運搬に際しご協力頂いた関係各位に紙面を借りて御礼申し上げます。

◇神宮司庁
◇山田工作場
◇日本通運株式会社
九州重機建設支店
◇宝栄運送株式会社

三十六歌仙図扁額
福岡県有形文化財に指定

去る三月五日、福岡県文化財保護審議会の答申に基づいた県教育委員会の決定により、当大社所蔵の三十六歌仙図扁額が福岡県指定文化財（有形文化財）に指定された。

これらの扁額は、三十六歌仙の姿と代表歌を描いた五組（計一七三面）の板額で、桃山時代から江戸時代にかけて制作、当大社へ奉納されて伝来したものである。五組の概要は次の通り。

❶天正年間（一五七三～一五九一）に宗像大宮司氏貞が辺津宮へ奉納したと伝わる最古の扁額（三五面）。絵は狩野永徳もしくは永徳の息子・光信と見解がわかれる。書は聖護院道澄。狩野派黎明期の数少ない作例とされ、以前から全国屈指の重要作品として知られる。

❷延宝八年（一六八〇）に福岡藩第三代藩主黒田光之が辺津宮内陣へ奉納した扁額（三六面）。絵は狩野安信で、書は京都の能筆家、藤原基時。この時期に福岡藩が実施した辺津宮境内造営などの整備事業の記念に制作、奉納されたと考えられる。

❸貞享三年（一六八六）に黒田光之が辺津宮拝殿へ奉納した扁額（三三面）。書は福岡藩の右筆頭を務めた大野市太夫、絵は福岡藩御用絵師の衣笠守昌（もりしげ）。江戸時代の地誌類から、③は長期の奉掲のために②の代用として制作されたと推定される。

❹元禄十三年（一七〇〇）に、中津宮の神職河野通元の求めにより、光之の重臣で優れた文化人であった立花重根が和歌を記して同宮へ奉納した扁額（三六面）。絵師は不詳。

❺安永八年（一七七九）に両浦氏子（当大社近隣の浦方の人々か）が奉納した扁額（三三面）。絵は福岡藩御用絵師の尾形守厚。書家は不詳。御用絵師の活動の広がりを示す作品。

この度、桃山時代から長きに亘る信仰の様を良好に物語る当大社の宝物が高く評価され、誠に喜ばしい限りである。五組の扁額に込められた人々の崇敬や祈りに応えるべく、今後も大切に後世へ伝えていくよう努力していきたい。

❶天正年間奉納　斎宮女御

❷延宝八年奉納　小野小町

（❶、❷写真＝藤本健八撮影）

❸貞享三年奉納　大伴家持

❹元禄十三年奉納　柿本人麻呂

❺安永八年奉納　紀貫之

福岡県指定文化財 指定記念 特別公開

「歌人たちの競演～宗像大社所蔵 五組の三十六歌仙図扁額～」

◆会　期　平成27年4月15日（水）～5月31日（日）
◆時　間　9:00～16:30（入場は16:00迄）
◆会　場　宗像大社神宝館3階展示室
◆拝観料　○大　人　500円
　　○大学・高校生　300円
　　○中・小学生　200円
　　15名以上は1名に付100円引

※三階展示室の展示替え作業のため、下記日程は1階・2階展示室のみの拝観となります。どうぞ御了承下さい。
◆会期前　4月13日（月）、14日（火）
◆会期後　6月1日（月）～3日（水）

第53回 若布献上

～玄海灘の天然若布を皇室に献上～

三月十九日、早春の玄界灘の天然初物若布を賢所、天皇皇后両陛下、皇太子同妃両殿下、三笠宮殿下へ、高向宮司、大江秀一氏（宗像漁業協同組合地島地区代表理事）、高橋義則氏（宗像漁業協同組合神湊地区代表理事）、随行神職の四名が宮中へ参内し、恙無く献上申し上げた。

この皇室への若布献上は、昭和三十八年の「宗像大社海洋神事奉賛会」設立に際し、宗像大神の御神徳が、国家・皇室の守護であることから、皇室の御安泰と聖寿の長久万歳を祈念して始められ、本年で五十三回目を迎えた。

福岡空港での手渡し式
巫女より全日空客室乗務員へ

奉製作業

搭乗者へ記念品を贈呈

秋の「みあれ祭」と並び、同会の一大行事である。

今年の若布は寒暖の差の影響が心配されたが、予定通り三月一日に地島沖で採取開始。関係者の御尽力により、濃緑で磯の香りの強い良質な若布が採取された。伝統的な技法で奉製された板状の乾燥若布が、三月十日に当大社に奉納され、神職・巫女が厳選し形を整えながら規定の量を袋に納め、献上の準備が進められた。

献上前日の十八日午前十時、本殿にて若布献上奉告祭を斎行し、杉箱に納められた若布を持ち出社した。福岡空港では献上者をはじめ、例年若布運搬の協力を頂く全日本空輸株式会社の皆様が参列し、当大社巫女より全日空客室乗務員への手渡し式が行われ、若布は機内へ運ばれた。また、この便に搭乗する方々には、当大社より記念品として張子の縁起物が手渡された。

献上当日の十九日午前十時、坂下門より宮中へ参内。掌典長楠本祐一氏に高向宮司が若布献上の旨を言上、賢所に献上申し上げた。続いて侍従職石田浩昭氏を通じ天皇・皇后両陛下へ献上申し上げた。宮殿にて高向宮司が記帳後、宮中三殿参拝の栄に俗し宮中での献上の儀を滞りなくおえた。

本年の献上者、大江氏（右）・高橋氏（左）

宮中を辞した一行は赤坂御用地にて皇太子・同妃両殿下、三笠宮殿下へ献上申し上げ、ここに宗像大社並びに宗像大社海洋神事奉賛会の春の重儀「若布献上の儀」を無事に終えることができた。

尚、本年も若布献上に際し、格別の御支援を賜りました出光興産株式会社、全日本空輸株式会社をはじめ、関係各位には紙面をもちまして厚く御礼申し上げます。

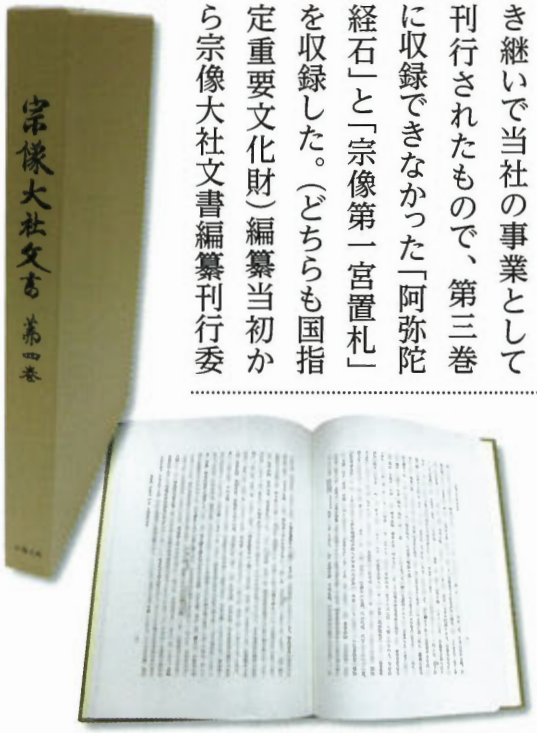
宗像大社文書第四巻を刊行

～天皇皇后両陛下へ献上～

平成二十七年元旦、辺津宮本殿遷座祭斎行を記念する奉祝事業の一つとして『宗像大社文書』第四巻が刊行され、一月三十日には高向宮司が宮中に参内し、天皇皇后両陛下、皇太子殿下を始め各宮家へ献上申し上げた。

この度の第四巻は、復興期成会（昭和五十五年～平成二十一年にかけ第一巻～第三巻を刊行）の事業を引き継いで当社の事業として刊行されたもので、第三巻に収録できなかった「阿弥陀経石」と「宗像第一宮置札」を収録した。（どちらも国指定重要文化財）編纂当初から宗像大社文書編纂刊行委員長を務めていただいた九州大学名誉教授川添昭二氏が執筆。各史料の翻刻・読下し文・註解・解題からなる本編と影印編の合冊で、索引を含めて総二七六頁、B5判の書冊である。

第四巻によって当社所蔵の中世史料を全て刊行することになり、『宗像大社文書』編纂・刊行の掉尾を飾るにふさわしいものとなった。



価格15,000円　（お問い合わせ=宗像大社）

氏貞公墓前祭

本年は承福寺による法要、公の遺徳を偲ぶ

十六世紀後半の戦国時代末期、懸命に神郡宗像を守り抜いた英傑、第八十代大宮司宗像氏貞公の法要が、命日の三月四日菩提寺である承福寺の埜村住職以下三名によって営まれ、この地に住み代々墓守を続けてこられた占部一族、地元今門地区の皆様、当大社より高向宮司が参列し公の遺徳を偲んだ。

この墓前祭は昭和六十一年より当大社と承福寺が隔年で奉仕している。郷土を守り抜いた中興の祖・氏貞公御一代の生涯に思いを馳せ、我々も更なる神徳宣揚に心を尽くす誓いを新たにした。

氏子評議委員会

三月二十日、今年度最後となる氏子会評議員会が置鮎会長以下六十四名出席の下、清明殿にて開催された。

本殿正式参拝後、清明殿へ移動し開会、議事は置鮎会長が議長に選出されて審議は始まり、事務局より春季大祭斎行・氏子奉幣氏選定の件が説明され、福津市・津屋崎地区より選定頂くことが承認され、審議は終了した。

本年度、当大社の諸行事・祭典等にご奉仕頂きました役員・評議員・総代の皆様方には衷心より御礼を申し上げます。

宗像大社菊花会 新年総会・菊作り講習会

二月十九日、宗像大社菊花会新年総会並びに菊作り講習会が神湊の魚屋本店にて、吉田会長以下会員約七十名が出席し開催された。

総会では、本年で四十五回目を迎える西日本菊花大会の日程について協議され、二十七年度の日程が決定された。また、平成の大造営を奉祝する花壇作成の件も協議され、各会員一丸となって作り上げる事が承認された。

総会終了後の菊作り講習会では、全日本菊花連盟顧問今川誠一先生をお招きし、二時間に亘りご講演頂いた。菊作りを始めて五十年以上経つ今川先生の知識を少しでも学ぼうと、ビデオやメモをとるなど、一同熱心に聞き入っていた。

講習会終了後は懇親会が開かれ、互いの菊作りや菊花会発展のため尽きることのない話題に花が咲き、第四十五回大会を盛大に盛り上げていく事を誓い合い、閉会した。

御造営奉賛者御芳名

（平成二十七年二月）（順不同・敬称略）

四〇〇、〇〇〇円
北九州市　高橋　敬子

三〇、〇〇〇円
宇佐市　山香　正
福岡市　小島　裕子
福岡市　中野　眞
福岡市　中野　芳子
福岡市　㈱NAKANO商会　中野　隆二

二〇、〇〇〇円
中央区　小山　一夫

一〇、〇〇〇円
奈良市　佐々木教子

五、〇〇〇円
いの町　松岡　陽子
茨木市　占部　博
北九州市　米満　俊英
静岡市　松岡林太郎
杉並区　西崎　良
茅ヶ崎市　菊池　優
福岡市　堀江　博子
文京区　井草翠依子
山口市　石原　海玄

三、〇〇〇円
和泉市　里村　達郎
久留米市　渡辺　篤

二、〇〇〇円
朝倉市　矢野　宙之
大阪市　村瀬　君夫
嘉麻市　坂口　和彦
北九州市　河野起美子
久留米市　大庭　秀彦
古賀市　矢野　聖史
下関市　山村　舞子
筑紫野市　寺山　美紀
中間市　佐藤　俊司
福津市　安永　俊昭
船橋市　廣幡　賢一
水戸市　稲野邉昌美・亜紀

宗像大社氏子会

福津市　吉田　晃

宗像大社奨学金 第56期生選定校長会

平成二十七年度の「宗像大社奨学金」の受給生を選考する、宗像地区中学校の校長会が三月二日、当大社斎館で開催された。

この宗像大社奨学金制度は昭和三十四年の今上陛下御成婚を奉祝し、その記念事業として創設。翌年の昭和三十五年より始まり、今年度で五十六期生となる。

当日は宗像・福津市の中学校長十名に参集いただき、当大社の奨学金制度について、受給生の選考方法、注意事項、支給を終えた五十三期生、今年度も支給する五十四・五期生について担当神職より報告を行い、選考の熟慮を依頼した。

五十年以上の歴史をもつこの奨学金制度の受給生は、既に八百人を超えている。社会に出て各方面で活躍されている方、或いは大学に進学し勉学に励んでいる方等様々である。この三月で受給を終えた学生諸氏には、もう一度この奨学金制度が参拝者のお賽銭（浄財）から成り立っていることを十分理解し、「郷土である神郡宗像を愛し、将来の日本を背負う有為な人材」になるため、各界で活躍することを切にお祈り申し上げます。

（続）海の寄物

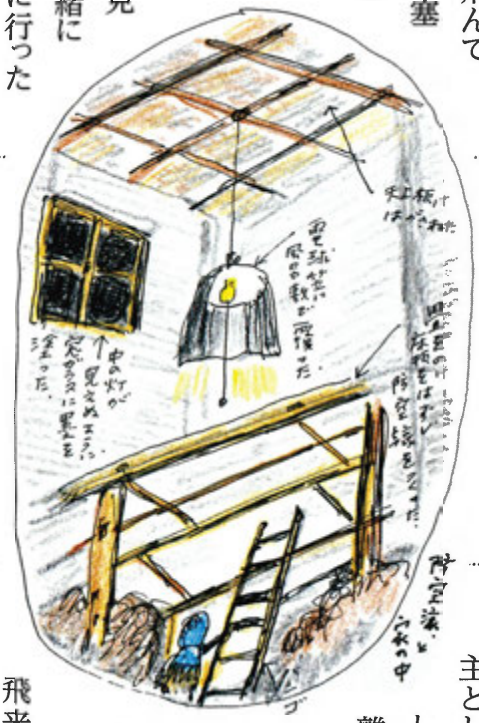
298

いしいただし

私がボーイングB29を見たのは、小学校二年ごろであった。高空を白い飛行機雲を引き、時折り機体が太陽に反射してキラリと光っていた。鈍い爆音を出して飛んでいた。超空の要塞（空の要塞）といわれた超巨大爆撃機である。偵察のためか単機で飛んで来る。

B29の残骸を見たのは、母親と一緒に岩田屋デパートに行った時に、正面入口に入って地下に下りる、階段の脇に置かれていた。泥が付着し黒く焦げたところがあった。ジュラルミンの銀色が今も鮮やかに記憶に残っている。

ある時、街で泣きやまない子に親が「B29が来るよ」と言っていたことを聞いたことがある。終戦末日本各地に爆弾の雨を降らした「悪魔の飛行機」であった。B29はアメリカが日本本土空襲のために開発したという長距離巨大爆撃機であった。まさに超空の要塞（スーパーフォートレス）であった。



アメリカ、ボーイング社製で、全長三十m、翼長四十三m、機体はジュラルミン製、プロペラは金属製、エンジンは四個、重量約五十トン乗員九～十二名、爆弾の搭載量四～九トン、火砲装備は十三㎜砲を主として約十六門を有していた。航続距離は五、二三〇㎞。（作られた初期と後半には改良が加えられ距離や爆弾の重量も多くなっている）

はじめて日本に飛来するB29は中国四川省成都基地群からであったが、昭和十九年六月サイパンが陥落するとサイパン基地から飛来し、東京、横浜をはじめ、日本各地に空襲がはじまる。サイパンから東京まで約二、五〇〇㎞である。

十九年六月十六日北九州爆撃がはじまっている。北九州は八幡製鉄所、造兵廠をはじめ兵器工場があり、小倉には小倉連隊があった。十九年十一月二十五日には大牟田空襲、二十年六月と七月と三度の空襲で焦土と化した。

久留米は八月五日、二十年六月十九日にはサイパン基地から発進したB29、二三三機が福岡を爆撃した。十九日午後十一時十一分から午前〇時五十三分、一機平均約七トン、総計一、五二七・三トンの焼夷弾を投下、博多部の奈良屋、冷泉、福岡部では簀子、大名あたりが爆撃された。被災戸数一二、八五六戸、死者九〇二人（負傷者一、〇七八人、行方不明二四四人）であった。

通常一都市に対して一〇〇機（一ウイング）で爆撃が行われているが、福岡市の場合二ウイング二〇〇機以上が参加、軍事施設は福岡二十四連隊があり、人口は三十二万三千人であった。当時私は天神の大名町に住んでいて、大名小学校に行っていた。大空襲の時には、次兄と下宿していた大学生の三人で防空壕をとび出し平尾の浄水地のところまで逃げた。照空燈に照らし出されるB29、B29から落す電波妨害の銀紙、焼夷弾の爆発音おそろしかった。私は裸足だった。

その頃学校でこんな歌を習った。「空襲警報聞えてきたら、今は僕たち小さいから、大人の言うことよく聞いて、あわてないで、騒がないでおちついて、はいっていましょう防空壕・・・」（参考文献　福岡県百科事典・B29撃墜記・明治、大正、昭和の郷土史）

第六四四回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

宗像市　日の里　佐藤　純一

海辺には星あまたあり其の中に吾れに向って光る星あり

評 良い歌だが、やや説明的なので〈吾に向きつよく輝く星の見ゆ海辺にあまた星ひかるなか〉とした。

北九州市　八幡西区　豊田　光子

この今のわれを抜けむと開運の恵方巻き食ぶ胸どに溜めて

評 現状に甘んじてはいけないと、努力する作者だろう。結句を〈願いを胸に〉。

宗像市　多　禮　早川　祥三

結び切るみくしの菩東風にとぶ緋寒桜は咲く枝を撰る

評 テーマが多く収まり切れないので、上の句を整理し〈御神籤を菩のごとく枝に結ふ〉とした。

福津市　若木台　山﨑　公俊

四百年経しゆゑ建替えしぬとあり菊姫祀る村社寂けし

評 古い村社に過ぎた歳月を思う作者。三句〈せしとあり〉、結句は〈寂けき村社〉と体言止めに。

宗像市　日の里　大和美由紀

散歩する夫の後追ひ森の中目覚めはじめの鳥の声聞く

評 早朝の爽やかで心地よい歌。仲の良いご夫婦が見えるよう。三句は〈森に来て〉。

宗像市　日の里　秋吉　嘉範

さげもんを見るたび思ふ堀割りの炬燵入りたるどんこ舟かな

評 柳川で炬燵舟を体験した作者か。三句以下〈柳川で乗りし炬燵を置くどんこ舟〉。

福津市　星ヶ丘　佐々木和彦

ことごとく藪椿の花散りたれば紅より緑に戻る遠つ樹

評 花の後の樹の表現が良い。三句は説明的なので〈散りおちて〉結句は〈～ひとつ樹〉に。

宗像市　池田　森　龍子

われを待つ人なき故里せゝらぎの変らぬ音を聞きつつ下る

評 せせらぎの音は変わらない故郷。〈待つ人のなき故里で変わらざるせせらぎの音ききつつ歩く〉と語順を変えてみた。

北九州市　門司区　北野カズミ

百点を取れば百円の婆賞に孫はよろこび楽しむテスト

評 孫の勉強を見る作者の工夫が面白い。婆賞には括弧を。結句は〈テスト楽しむ〉に。

宗像市　田久　巻　桔梗

晩酌と夕食すませ寝入りたりかみさんごめん、ホメオスタシだ

評 結句はこの場合「生理現象」程度の意だろう。難解語で煙に巻こうとする作者が面白い。

福津市　若木台　野間　精一

カチガラスは春告げ鳥か向家の柿の木に二羽来て高鳴く

評 春を恋う作者。春告げ鳥は鶯の異名なので二句は〈春を告げるや〉結句〈～鳴けり〉に。

◆選者詠

うかうかと過ごせば日暮れ花時はとかくたましひさ迷いやすく

アブラナ科葉物の野菜はるを咲きさ庭ほとほと黄のはなの渦

第六一七回 俳句作品集

宗像市　多　禮　早川　祥三

悴んだ息ハッとする巫女溜

宗像市　武丸　白土　凌一

雪降りて小川の魚ものかげや

宗像大社横
海の道むなかた館 で
開催中

編集後記

〆切りに追われるなか、桜前線とともにうれしいニュースが！地元、宗像の東海大学第五高等学校ラグビー部が創部三年目にしてチャレンジ枠ではありますが、全国高校選抜ラグビー大会（期間＝三月二十～四月七日）への出場を決めました▼実はこの東海第五校のラグビー部には、平成二十四年四月の創部時から参拝頂き、その後も正月は毎年必ず、部員、関係者皆様で安全と必勝を願い、度々、お参り頂いておりました。創部三年目にして全国大会出場という快挙。宗像大神の御神徳を戴かれ、活躍を期待したい▼実は私、国学院栃木ラグビー部のOBでございます。両校が勝ちあがれば対戦も…どちらを応援すればいいものか…（鈴）

4月祭事暦

1・2日 春季大祭
（1日目）
午前11時～ 一日祭
（2日目）
午前11時～ 二日祭
午前11時40分～
高宮祭、第二宮・第三宮祭
宗像護国神社 春季大祭
交通安全講社祭（本殿）

15日 月次祭
午前10時～
高宮祭、第二宮・第三宮祭
午前11時～総社祭

29日 昭和祭
午前11時～

発行所 宗像大社社務所・宗像会
住所 〒八一一―三五〇五 福岡県宗像市田島二三三一
電話 （〇九四〇）六二―一三一一（代）
発行人 葦津 幹之
編集人 大塚 宗延・鈴木 祥裕
制作・印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行
定価1年送料共 1,000円